

幼児教育に携わる人のための1歳期の言語生活の発達とその目安 —野地潤家博士の『幼児期の言語生活の実態』Iを手がかりにして—

前田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2020年6月4日受付、2020年7月10日受理)

要 旨

引き続き野地潤家著『幼児期の言語生活の実態』I (昭和52 (1977) 年、文化評論出版) を取り上げて、1歳1か月目から1歳3か月目までの一乳幼児の言語生活の実態を通時的に追っていき、幼児の言葉が何を手がかりにして発せられるのかを明らかにし、どう発達していると言えるかを探ろうとしたものである。それを1歳期では、場面本位に①行動に伴って言葉が出る時、②自ら語として意識して言う時、③音を聞いて擬音化する時、④後で思い出して擬音化する時、⑤人の発言をまねて言う時、⑥何かしてほしいことを言葉にならなくても言おうとする時、⑦相手の言うことの理解に力を注ぐとき、⑧自分で発音の練習をしている時に分けて、整理してみた。すると、これら8項目がどれも出てくる時期から、だんだんいくつかに焦点化されてくることが明らかになった。

キーワード：『幼児期の言語生活の実態』I, 野地潤家, 一語文, 指差し行動, 通時的研究

はじめに—本研究の目的・方法、資料—

『九州女子大学紀要』第55巻第2号、第56巻第2号では、0歳期の言語生活の発達について野地潤家博士の『幼児期の言語生活の実態』をもとに、一幼児の発話場面を中心に通時的に追っていき、発達を見いだす指標を明らかにした。そこで、本稿では、1歳期の1か月目から3か月目までの発話場面を取り上げ、さらにどのように言葉を用いた生活が発展していくかを探っていきたい。今回も着目する点は、言葉が何をてこに出てくるかである。

一 さまざまな試行がなされる (1年1か月目)

1 行動に伴って言葉が出るようになる

(ア) 昭和24 (1949) 年3月9日…「おもちゃの『カタカタ』(押し歩いてあそぶもの)を押しながら、『ヨッチ. アッチ。』の文のように言っている。たどたどしい言いかたである。」(I, p77)

(イ) 昭和24 (1949) 年3月27日…「大洲の祖母のうち。まりを投げる時、『パイ. ポイ。』のように、投げるのにもなって声が出てくる。」(I, p83) (続く3月30日にも、同様の場面ではっきりと『ポイ。』と言っている。)

(ウ) 昭和24 (1949) 年3月28日…「淵本のおばさんのうち。ここで、はじめて、牛を見る。おばさんのだっこしてもらい、牛小屋の牛を見る。なにもいわないで、じっと見ていたが、しばらくたって、『ハーッ。』と大きい息をつく。」

(エ) 昭和24 (1949) 年3月30日…「大洲の祖母のうち。(中略)水槽のところへつれていくと、ひしゃくに水をくんでもらい、『アーッ。』のように言いながら、おいしそうに水を飲む。」(I, p84)

[考察] (ア) はおもちゃのカタカタを押している時、声が出たというのであるから、一歩踏み出して「ヨッチ」、また次の一歩を動かして「アッチ」と言っているようである。一歳の誕生日で、何にもよりかからずに「三四歩、歩くようにな」っている (p77) 時期のため、まだ足が出にくく、声を出してやっと足も出せている状況なのであろう。そうだとすると、一歳になったばかりなのに、声を出した方が歩きやすいことが本能的に自覚できていることになる。 (イ) のまりを投げる時、声が出るのも同様に自然に行っている。こういうことは、大人と同じようにできるのである。

(ウ) は、(ア)・(イ) のように行動と声とが一致するものではないが、初めて牛小屋の牛を目を離さずに

見て疲れたのか、その後「ハーッ。」と言って大きいため息をついたもの。意識を集中させてみれば、その後大きい息をつくのは、1歳の幼児も大人も同じようである。(エ)の澄んだ水を汲んでもらい、うれしくて「アーッ。」と声をあげて飲むのも、年齢の違いはあるまい。

2 自ら語(一語文になる)と意識して発する

相手に呼びかける時の「バー。」や、乗り物を見たり乗ったりする時の「ブーブー。」は定着し始める。それを除けば自ら語として意識して言おうとするものは、以下の3例である。

(ア) 昭和24<1949>年3月29日…「大洲の祖母のうち。(中略)母に向かって、くつ(タータ)をはかせてくれという時、『タータ。』のように言う。『タータ』と、うねりをつけて言う。ものを相手にわたす時にも、このように言う。ものを受けとる時にも、言うことがある。」(I、p83)

(イ) 昭和24<1949>年3月30日…「大洲の祖母のうち。しっこをさせる時、自分から、『シ。』のように言う。言うのを見ていると、ちいさいつばきがとんだりしている。力を入れて発音しようとしているのがわかる。」(I、p84)

(ウ) 昭和24<1949>年4月8日…『アリガトー。』と言うのを、『アリ…ト。』のようにまで言えるようになった。しかし、『リ』は、いちじるしく弱く、かすかにそれとなく聞きとれる程度である。はじめは、『ありがとう。』という時、『ト』のみであった。『…ト。』の『…』のところまで口をもぐもぐさせていたのである。」(I、p86-87)

[考察] (ア)の「タータ」は、同年2月17日に母が初めて教えてくれ、幼児もまねて発音した語である。それ以降、本書『幼児期の言語生活の実態』Iには出てこないが、くつをはかせてもらう機会はおりにあり、筆録者(野地潤家氏・一枝氏)が気づかない時にも、大人がくつについて「タータ」と発言し、澄晴さんがまねて言う場は何度もあったのであろう。前段では、幼児の側から自然に発し、そればかりか後段では、靴に限らず、もの全般に般化して使うことが報告されている。一度ぴったりしたときに使用できると、こんな場でも使ってみようという大胆さが生まれるのであろう。(イ)の「シ」は、この月の9日にも、「夕方、母におんぶされていて、(中略)『シ』と発音した。」(I、p77)とある。ただし、その時には場面の説明がない。まだ、おしっこを伝えるよりも、試しに発音してみる面が強かったのであろう。しかしここでは力を入れて発音していて、はたの人にもしっかりと伝わったようである。それだけ語としての意識も明確にあったと言えよう。

ただし、(ウ)の「アリ…ト。」のように、一語をまるごと言い尽くせないばあい、このように語末の次に耳に残りやすい最初の二音に加わるが、間の「ガ」が言えないというようなことが出てくるのである。とは言え、1年1か月目となると、一語を発音する見通しは立っているようで、語末の一音しかとらえられなかった時期に比して、語としての認識は、明らかに進んでいる。

3 音を耳にして擬音にしてみる

(ア) 昭和24<1949>年3月10日…「母におんぶされながら、母がさしみにそえる大根をきぎむ音(カチカチカチ)をきいて、その音にあわせながら、『チャッチャッチャッ。』の文のように母に言う。母が『チャッチャッチャッ。』の文のように言うと、母の顔を自分のほうに向けさせ、母の口の中に指を入れてみている。」(I、p77)

(イ) 昭和24<1949>年3月11日…「夕方、母におんぶされながら、母がパンと割るまきの音をまねて、『パッ。』のように言う。口の中で、聞きとれるほどに、低く言っている。」(I、p78-79)

(ウ) 昭和24<1949>年3月31日…「大洲駅の待合室。まめいりを手にもって、ふりながら、『ダイ ダイ ダイ。』のように、大きい声で言う。」(I、p85)

[考察] (ア)の前段は、母が包丁で大根を刻む音(カチカチカチ)が規則的に聞こえてきて、その規則性をどう言葉で表そうとそれほど意識もせず、音に合わせて『チャッチャッチャッ。』と擬音にして、母に伝えたようである。ところが、後段で母が自分の言った通りを真似して発音してくれた時、同じように発音できるのに驚いたらしく、①どのように口を動かしているのか確かめようとして、わざわざ「母の顔を自分の

ほうに向けさせ」、②あえて「母の口の中に指を入れてみ」たようである。本人はこんなふうに関心をもち、口を動かしたとまでは自覚していなかったためであろう。こういう場では、母は完全に発音の先生であり、子はそれを何としても学ぼうとする生徒になっている。それに対して、(イ)は先の(ア)以上にどのような音にするか自信がないようで、ひそかに口の中で低く言ってみたというのとどまるのであろう。記録者がこうした違いも逃さないで聞きとっていることに感心させられる。

(ウ)はまめいりが器に入って、振れば調子よく音を立てるため、うれしくなって「ダイ ダイ ダイ。」と大きい声を出しているようである。これも、擬音化していると解したが、「ダイ ダイ ダイ」は前月(0歳12か月目)の発音練習に出て来たものである。発音練習で慣れたものを、今度はまめいりを振る時の音と合わせているわけである。もっと適切な位置づけが可能かもしれない。

4 思い出して擬音化する

前項は聞こえてくる音がある場に出ていたものであったが、音を立てて割った日の翌日、その音を思い出して擬音にしている例も出てくる。

(ア) 昭和24(1949)年3月13日…「昨夜わった皿のかけらを手にとりながら、『パン。』のように言う。大きい声ではないが、それをひとりごとを言うように繰り返す。大きいほうのかけらが下に落ちて、二つにわれてしまう。その後、『パイ。』とはっきりと出す。」(I、p79-80)

[考察] (ア)の事例は、(2)聞いた音を擬音にしてみるに挙げた2例よりも後に現れたものである。前日(3月12日)に割った皿のかけらを手に取るまですると、割れた時をありありと思い出したようで、「パン」と言っている。きのうは「パン」と音がして割れたねと言っているつもりなのであろう。当然、目の前で聞いて声にする方が先で、思い起こして擬音化の方が後である。しかし、偶然その場で手に取った大きいほうのかけらがさらに割れ、きのうとは違って聞こえたようで、「パイ。」と発音している。こちらは擬音かと言えるかどうかかわからないが、その場で出た音を表しているのなら、広い意味で擬音と言えよう。しかし、そうだとすれば、二つ目の発言は前項の聞いた音を擬音化した例になる。

5 発音をまねて言い、別の場で発言できるようになる

(ア) 昭和24(1949)年3月11日…「父が『エヘン。』のようにせきばらいをすると、すぐにまねて、『エヘン。』の文のように言う。」(I、p78)

(イ) 昭和24(1949)年3月15日…「母が『スミハレチャン。』の文のように言うのと、『エヘン。』のようにせきばらいをする。『ハーイ。』とか、『アーイ。』とかのへんじはまだできない。ときには、『アーア。』の文のように言ったり、『ウン。』の文のように言う。」(I、p80)

(ウ) 昭和24(1949)年3月20日…「午後、紙屋町(広島市内)の山本写真館に、写真のとりなおしにいつの帰りに、基町浴場の近くで、五、六歳の男の子が大きい声で、『カーチャン。』の文のように言っている。それをまねて、『アーア。』の文のように言う。『カーチャン』と言えないので、その調子をまね、自分の既得のことばで言っているのである。ついで、母が『オカーチャン。』の文のように言うのと、『ハーイ』『アーイ』と言えないので、『アーア。』の文のようにこたえる。」(I、p81)

(エ) 昭和24(1949)年4月2日…「平井の祖母のうち。平井のおばさん(ヨシコちゃんのお母さん)がヨシコちゃんに『ヨシコちゃん チャーチャガ イル ノ? ナニガ イル ノ?』の文のようにきいている。『チャーチャ』は、お茶のこと。すると、そばにいた澄晴が、『チャーチャ。』の文のように言ったり、また、『チャーチャ。』の文のように言ったりする。長音化に成功したり、失敗したりしているのである。」(I、p85)

[考察] (ア)の例がでてくる日には、父から他の言葉も出され、すでにまねて言う練習をしていたのである。さかのぼれば、前月にもそのような場があり、「テン。」や「トーチャン。」などが言えるようになってきていた。そのおかげか、(イ)の場面では、母から呼びかけられたとき、返事をする前にせきばらいをし、その後で『アーア。』や『ウン。』という返事をしたと言うのである。ただし、『アーア。』は、まだ『アーイ。』と口を締めることはできていない。前月から課題になっていたことだが、まだ引き続いている。

他方、(ウ)のように、聞いても言えない語は言えるところまでしか言えないところが残っている。最初

の「アーア。」はまだ聞いた通りの「調子をまね」で発音していたのである。はじめの「アー」が「カー」、二つ目の「アー」が「チャン」のつもりであろう。しかし、母が手助けに言ってくれた「オカーチャン。」となると、「オ」がただけであるが乳児にとって長すぎて覚えられず、とても言えない気がしたようである。そのため、「調子をまね」ということもできず、「アーア。」と途中でもうやめたような言い方に終わっている。(エ)は、「オカーチャン」ほど長くはないためか、「チャーチャ。」と言えることもあり、「チャチャ。」としか言えないこともあるというのであろう。

6 いろんな思いを今言える言葉で言ってみる

(ア) 昭和24〈1949〉年3月11日…「父のへやへこようとして、ふすまをあけてくれという。あけてやらないと、さらにあけてくれと、『フン。』『エン。』『アン。』のように言って、おこる。あけないで、そのままにしておく、かんしゃくをおこしたように、わめき泣く。思うようにならないと、おこってしまう。」(I、p78)

(イ) 昭和24〈1949〉年3月12日…「ふすまをあけてほしいとか、だかれないとか、あちらへいきたいとか、そのような時は、『ウン ウン。』の文のように言う。思い通りにいかないと、『アッ。』の文のように言って、せいっぱいにさげびだし、泣き声になる。」(I、p79)

(ウ) 昭和24〈1949〉年3月15日…「午後、あられをいっている時、あられをまぜたくて、『ウ ウ ア ア。』の文のように言う。母はとめて、『オ オ デス ヨ。アツアツ デス ヨ。』の文のように言う。少して、あられを練乳の空罐の中に入れ、中腰になって、『アーアーア。』のように大きい声で言う。」(I、p80)

(エ) 昭和24〈1949〉年3月19日…「なにかしてほしいという時、まず『アー。』のように強く言って、注意をよびおこし、そのほうをさし示し、こちらを向いて、母の目をじっとみるようにする。なにかをしてほしいという表情は、まだあまりできない。」(I、p81)

(オ) 昭和24〈1949〉年3月21日…「犬に興味を持ち、ゆきずりに見る犬でも、ふりかえってみる。母の背中でおどりがあがってよろこび、その犬のほうをじっと見ている。母がいこうとすると、『ア ア ア。』のように言って、母の足をとめて、犬を見る。」

(カ) 昭和24〈1949〉年4月8日…「母にお茶を入れてもらって、それを『ハー。』とっては、おいしそうに飲んでいる。ついで、仕事をしている母を呼んで、やかんからお茶を入れてくれというのに、『パー。』の文のように言う。自分のもっとも出しやすい音を使っている。また、『イーン アン。』の文のようにも言う。これは、すこし鼻にかかり不明瞭である。とにかく、入れてくれというのである。また、『ウンウン。』の文のようにも言う。これは、いつもの要求のしかたである。のみほすと、きまってちゃわんをさし出し、それにみたしてもらうのをたいへんよろこぶ。両手でもったちゃわんを出して、ひとみをひからせる。」(I、p86)

[考察] (ア) と (イ) は、似たような場面の展開になっている。しかし、出てくる言葉は決まっていない。要求する際に言う言葉が、(ア) では「フン。」「エン。」「アン。」であるが、(イ) では「ウン ウン。」である。(カ) の説明によれば、後者の方が通常のようなものである。「ウン」を二回重ねて言うだけに要求する気持ちも強いかもしれない。怒ってしまった時の言葉が(ア) にはなく、(イ) には「アッ。」と記されていることとも連動している。(ウ) は、いっているあられが跳ねているのを見て自分でまぜたくなり、発した言葉だとする。新しい状況に直面したときなので、どういけばよいかいよいよわからず、「ウ ウ ア ア。」のような言い方になったようである。ただし、いったあられをいくつか空き缶に入れてもらってゆすってみるのはいい音がして気分がよくなったようで、「アーアーア。」と喜びの声をあげている。(エ) は、注意喚起の時に発する「アー。」で、大きくなつての表情などには及ばないが、出発点としては一致していると言えよう。(オ) の母が犬のそばから離れていこうとすると、「ア ア ア。」と言うのも、慌てた時の言葉として自然である。(エ) と同じく、誰でも言いそうである。(カ) は、内容はお茶をもっと入れてという要求であるが、代表的な言い方は『ウンウン。』のように(イ) の『ウン ウン。』と似ており、また要求はこれまでと違うので、『パー。』と言ったり、『イーン アン。』と言ったりと、あれこれ試しているであろう。

言葉を知らないために、かえってさまざまに工夫しているのである。

7 言われたことをちゃんと理解して行動に移したり、尋ねられたことについて指差して答えたりする

(ア) 昭和24〈1949〉年3月12日…「母に『スミハレチャン オサトーオ ツケテ タベナサイ。』の文のように言われると、パンに、そばにあるお皿の砂糖をつけて、たべる。」(I, p79)

(イ) 同年同日…「お隣の竹原のケイコちゃんとあそんでいる時、母に『スミハレチャン ケイコチャン ト オテテオ ツナイデ アソビナサイ。』の文のように言われると、ケイコちゃんと手をつないでふっている。」

(ウ) 同年同日…「母が『オハナ ワ?』の文のようにきくと、母の鼻をさす。ついで、母が『オッパイ ワ?』の文のようにきくと、母のお乳をさす。つぎに、母が『オミミ ワ?』の文のようにきくと、母の耳をさす。」

(エ) 昭和24〈1969〉年3月16日…「朝、お隣の竹原さんのうちの屋根に、すずめが四羽遊んでいるのを指して、父が『スミハレチャン チュンチュン ダ ヨ ホラ。』の文のように言うと、そのほうを見る。それを見て、声をあげてよろこぶ。」(I, p80)

(オ) 昭和24〈1949〉年3月19日…「朝、春の雪がふる。父が『スミハレチャン ホラ ユキガ フッテル ヨ。』の文のように言うと、うれしそうに見る。手をふり、うれしがって見ている。また、母におんぶされて外に出て、よその人が犬をひいていくのを見て、さかんにうれしがる。」(I, p81)

(カ) 昭和24〈1949〉年3月30日…「大洲の祖母のうち。クミコおばさんが、水いじりにつれていこうとして、『スミハレチャン ブンプエ イコー。』のように言うと、すぐにおばさんに抱かれる。『ブンプ』は、大洲の祖母のうちのポンプの水源地になっている谷川の水をひいた水槽の水のことをさして言っているのである。」(I, p84)

(キ) 昭和24〈1949〉年4月8日…「母が『オテテオ キレー キレー シナサイ。』の文のように言うと、両手をはたはたと打って、ちりをはらうようにする。戸外であそぶようになると急に視界がひろくなり、ききわけもひろまってくる。夜、就寝前にも、『オテテオ キレー キレー』をさせると、おぼえていて、そのようにする。」(I, p87)

(ク) 同年同日…「おもちゃの犬をねかせて、母が『ネンネ。スミハレチャン ワンワン ネンネ。スミハレチャンモ ネンネ シマショー。』のように言うと、おもちゃの犬のそばにきて、ねる。ついで、母が『ワンワンニ ウマウマ ヤリナサイ。』の文のように言うと、自分のたべていたパンを、おもちゃの犬の耳のところへもっていく。」

[考察] ここでは、三つの反応が見られる。一つは、(ア)・(イ)・(カ)・(キ)・(ク)のように、母やおばからある行動(パンに砂糖を付けて食べること・友達と手をつないで遊ぶこと・水いじりに行くこと・おもちゃの犬と一緒に寝たりパンをやったりすること)を勧められて、言葉は出ないがそれをきちんと理解し、実行したり、実行しようとする態度をとったりする例である。二つ目は、一つ目と共通するところが多いが、(エ)・(オ)のように、父から見ること(四羽のすずめが遊んでいるところ・春に雪が降っているところ)を勧められて見てみると、確かにおもしろかったり、新鮮だったりして喜んだと言う例である。これら二つは、いずれも父母からまとまった話があり、言葉は出ないものの、それに触発されて行動力や見る目を育てるものになっている。それに対して、三つめは、(ウ)のように、少しずつ聞かれて行って、小刻みに指差しなどして答えないといけない場で応じる例である。聞きかたも答え方も違ってくるおもしろさがあるが、いずれについてもよく答えている。

8 発音練習の継続

初めて口の形を整え、どんな音が出るのか試してみる一音の発音練習「メ。」(3月10日)、「キ。」「ピ。」(3月19日)のほかに、下記のような例が記されている。

(ア) 昭和24〈1949〉年3月11日…「『ヤイ。』とはっきりと言う。『リ』という時もあるが、まだあいまいである。(さらに『ヤイ。』が続く。『ヤイ』の『イ』母音がはっきり出てくる。それにつれて、『シイ』『チ

イ』の『イ』も聞かれる。

窓からのぞいていて、水道栓のところにいる母に、『ヤイ。』のように言って、呼びかける。」(I、p78)

(イ) 昭和24〈1949〉年3月12日…『ラリ ラリ ラリ。』のように調子よく発音をしている。よく見ると、舌の先を下の前歯(二本)にあてて、しきりと動かしている。一つの母音なり、子音なりが、くつきりとうかびあがってくるのは、くりかえし練習してからのことである。(I、p79)

(ウ) 同年同日…「下歯二枚に、舌の先をあてて、『リロ リロ リロ。』のように、くりかえし言い、練習している。はつきりと言えるのではない。」

(エ) 昭和24〈1949〉年3月16日…「くつきりと発音されるのではないが、『アララララ。アラリラリ。』のように、くりかえし言う。ア母韻を先導として、しきりと練習する。時に、『アヤ。』のように言う。(I、p80)

(オ) 昭和24〈1949〉年3月21日…「そうとうつよく、大きい声で、『ラリラリラリ ルリルリルリ。』のように言っている。くりかえし、舌を動かしている。上下に二本の歯がはえそめたところは、舌の先を下の歯にあてて、低く小さく、『ラリラリラリ』と発音していたが、今はかなりなれて、大きい声で言うようになってきた。」(I、p81-82)

[考察] (ア) の「ヤイ。」はすでに2月26日にも出て来、くりかえしも確認されていた練習である。ここでも語末のあいまいなところから徐々に安定感が出てくるところが記録されている。ここまできると、ひとりごとのように発せられていたものが、相手に対して呼びかけられるようになる。こうなると、「ヤイ」は意味を持つてくることになる。(イ)・(ウ) は上下の歯が生えて初めて出せる音のようで、いずれも二音のくりかえしである。これらが基本になって、(エ) の「ア」がついて「アララララ」という長く続くものや、「アラリラリ」という「ア」と「ラリラリ」との結合も自然に言えるようになるのであろう。「アヤ」も新しい音と組み合わせせておもしろがっているようである。(オ) の発音練習の前半は「ラリラリラリ」と(イ) のままであるが、後半の「ルリルリルリ」となると、同じ行でも違う音と組み合わせせており、変化を楽しんでいる様子うかがえる。発音練習が幾分おもしろさを伴うものになってきつつある。

二 文を理解することに力点を置く時と表現する時との枝分かれが進行する(1歳2か月目)

似たような事例が続くが、主だったもののみ挙げていく。

1 行動に伴って言葉が出るようになる

(ア) 昭和24〈1949〉年4月27日…「庭に出て、雨上りのえんどうの白い花の上を飛ぶ蝶を追いまわしながら、なにか口の中で言っている。聞きとれない。」(I、p91)

[考察] 行動は言葉を発する原動力にもなるが、何を言うかとなると、はずむ思いはあっても、はつきりした言葉になりきれないこともある。言葉を覚え始めるこの時期では、よけいに言葉にしにくいということもあるのであろう。だんだんこのような事例は少なくなっている。

2 自ら語として意識して言う

(ア) 昭和24〈1949〉年4月18日…「白い蝶の飛んでいるのを見て、『チョーチョ。』のように母に言う。『チョーチョ』は、あまりはつきりした言いかたではないが、『チョーダイ』と言う時よりも、ややはつきりと言う。」(I、p89)

(イ) 昭和24〈1949〉年4月19日…「『オトーチャン』と言おうとしているが、うまく言えない。『オ〜チャン。』(→父)になる。『トー』の『オ』母韻の長音化がうまく言えない。また、『チャン』というの、まだよく言いこなせない。」

(ウ) 昭和24〈1949〉年4月22日…「朝、寝が足りて起きる時、目はひらかないまま、右手をさしだしながら、『チョーダイ。』のように言う。このころ、さかんに、『チョーダイ。』と言うので、それがなれば無意識裡に出るものと思われる。よそへつれていっても、ほしいものがあると、はつきりと、『チョーダイ。』と言う。」(I、p90)

(エ) 昭和24〈1949〉年4月27日…「お隣の浜本のおばさんがみえると、たいへんよろこぶ。おばさんが

帰る時は、『アン。』の文のように言って、頭をさげる。また、おばさんといっしょに買物に行って帰った時、母がおばさんに、『オセワニ ナリマシタ。』の文のように言うと、澄晴も、『アン。』の文のように言って、頭をさげるようにする。」(I, p91)

(オ) 昭和24(1949)年4月28日…「朝、父が出勤するのを見送って、『アッ。』の文のように言って、しきりに頭をさげ、からだをかがめて、見送る。『アン。』ともなる。かなりはっきりした声である。昨夜、国広さんを父とともに見送っていき、家の近くの新生学園の角でお別れする時、『アッ。』というあいさつがはっきりできた。夜も、母の乳房にすがりながら、幾度かくりかえし、『アッ。』の文のように母に言う。」(I, p92)

(カ) 昭和24(1949)年5月2日…「父が『サー サンポニ イキマショー。』の文のように言うと、すぐに、『アッ。』の文のように言う。たいへん敏感になって、すぐに言う。」(I, p94)

(キ) 同年同日…「三歳の女兒に、ボールをつきだして、『ハイ。』の文のように言う。そして、すぐとりかえてしまう。こどもとあそぶことを、たいへんよろこぶ。」

(ク) 昭和24(1949)年5月4日…「『パン』のことを、『パンパン。』(→母)のように言う。昨日あたりから、これが言えるようになってきた。」(I, p95)

(ケ) 昭和24(1949)年5月5日…「寝起きなので、『パンパン』というのに、『ピャンピャン。』(→母)のように言う。『パンパン』のうち、一つ目の『パ』は、言えるが、二つ目の『パ』は、『マ』に近くひびいたり、『ポンポン』に近くなったりもする。」

(コ) 昭和24(1949)年5月8日…「このようなかずをかぞえるおもちゃ(図がある)を、六〇円で求めてくる。玉を左右に動かしながら、『フターツ。』(→己)の文のようにくりかえして言う。ついで、見るものすべてに、『フターチュ。』と言う。」(I, p97)

[考察] (ア) の場面よりも以前にこれと同じような場面があり、父か母かが「チョーチョ」と教える機会があったのだろう。それにしても、この時点で後の出てくる「チョーダイ」よりもはっきりと言えたことは確かで、母の驚きも大きかったことだろう。これは名称を思い出して言う例にもなるが、擬音化したものでないので、一応ここに入れておく。

他方、(イ) は、「トーチャン」とは言っていたのに、「オ」を加えようとして、一語が長くなりすぎてうまく口を動かせなくなった事例である。分析的には、確かに指摘の通りであろうが、言う側からすれば、「オ」の次に「ト」を意識して発音するに至らなかったのが、失敗の要因であろう。

(ウ) の『チョーダイ。』を言う前、4月17日には、『『チョーダイ』というの、てのひらを上にして、片手を前につきだしてい』た (p88-89) という。その時点では、動作が主で、音声は出ていても、添え物のようだったのであろう。ところが、ここでは無意識に出てきたため、何をほしいのかとは切り離され、言葉としての独立性が出てくる。実質的には、その後ほしいものがあつた時にしっかり声を出したことであろう。

(エ)・(オ)・(カ) は、挨拶の言葉の獲得をめぐる経緯が伝わってくる事例である。4月27日の時点では、(エ) のように、頭を下げてお礼をいう時の言葉は、「アン。」だったのである。他方、同じ日の夜、父の友人を見送ってお別れする時には、「アッ。」と言っている。(オ) の翌日出勤する父を見送る時の挨拶も、「アッ。」でよかったのである。しかし、「しきりに頭をさげ、からだをかがめ」る動作をしていると、「アン」ともなってくる。当然起こってくる揺れであるが、(カ) でも、よく混同せずに「アッ。」と言っている。

(キ) の「ハイ」には、4月28日、5月2日の次のような場面が先行している。

「母が弁当箱を持たせ、『オトーチャン ハイ。』の文のように言って、父に渡すようにさせる。すると、たどたどしく、『オトーチャン ハイ。』の文のように言って、父に渡す。一語文から二語文へと伸びていこうとするようすがみられる。」(I, p92)

「父のところの弁当箱を持ってきて、『オトーチャン ハイ。』のように言おうと、口をもぐもぐさせている。そして、ちゃんと渡す。」(I, p93)

この事例からすれば、「ハイ」は、もともと何かを渡す時に用いる言葉で、「はい、どうぞ。」の省略された言葉のようである。「ハイ」はそれを単純化しているが、本来のていねいな言い方が少し残っているであろう。4月28日には、母の発言をまねて渡すだけであろうが、5月2日になると、一度自分から積極的に

言って渡そうとした上で、三歳の女兒に自分から積極的に「ハイ。」とボールを渡している。自分の語彙として使っていると言えよう。

(ク)・(ケ)は、「パン」のことを「パンパン」ということが、報告されている。(ク)では、5月3日ぐらいいから言えるようになったことが指摘されている。とは言え、(ケ)では、その発音が安定したものではなく、まだまだいくらでも揺れ動いていることが周りの目から語られている。

(コ)では、数を数えるおもちゃを前にして周りの人がいろんな言葉を発したのであろうが、「フターツ。」だけをくりかえしたとある。ただ、「フターツ」は聞いた通りの言い方であり、初めて覚えた数なので、般化して、見るものすべてに「フターチュ。」と言ったという。いつの間にか、幼児の言いやすい「フターチュ。」になっている。

語彙の獲得は、一歳の幼児にとって易しいものではなく、わがものとする努力の第一歩が踏み出されている。

3 音を聞き、擬音化してみる

(ア) 昭和24 (1949) 年4月20日…「母が燃えのこりのまきに水をかけ消している。シャーン、シャーンという音がする。それをまねて、『チャーン。チャーン。』の文のようにたどたどしく言う。」(I, p89)

(イ) 昭和24 (1949) 年4月29日…「母が台所で、炭に水をかけて、シューと消している。その音を聞くと、すぐにふりかえって、『ターン。』のように言う。」(I, p92-93)

(ウ) 同年同日…「母につれられて電車に乗った時、運転手が足で、『チャン チャン チャン』と鳴らすのを聞いて、『ティン ティン ブー。』(→母)の文のように言いはじめる。ついで、すれちがう電車を見ると、手をあげて、大きい声で、『ティン ティン ブー。ティン ティン ブー。』(→母)の文のように言う。電車が見えなくなるまで言っている。」(I, p93)

(エ) 昭和24 (1949) 年5月4日…「火のついたまきに水をかけて消す時の『シューーン』というのをまねて、『ターン。ターン。』の文のように言う。今までの『ターン ターン』よりも、『タ』のところをつよくしっかりと、『ターン。ターン。』と言う。言いはじめと、なれてきた時とでは、その安定感やたしかさがよほどちがう。このつよさたしかさがかつきりと出てくると、あとは大体において、あぶなげないものになっていく。」(I, p94-95)

[考察] (ア)・(イ)・(エ)は、いずれもまきや赤くなった炭に水をかけて消す時の音をどう表すかであるが、4月20日には「チャーン。チャーン。」→4月29日には「ターン。」→5月4日には「ターン。ターン。」と擬音化している。消す時点でどのくらい火が盛んであるかで水をかけた時の音も同じではないようで、筆録者も表現を変えている。幼児も、そのことがわかっているらしく、はじめは「たどたどし」い言い方だったのが、「ターン。」と明確なものになり、さらに「安定感やたしかさ」をもって「ターン。ターン。」とどこに力を入れて発音しているか伝わるものになっている。しっかり聞いており、自信をもって声を出しているからであろう。

(ウ)は、運転手が足で鳴らす鈴であろうか。筆録者が「チャン チャン チャン」と聞いた音を、幼児は「ティン ティン ブー。」ととらえ、気に入って電車が見えなくなるまで言っていたとある。「ティン ティン」の部分はこのように聞こえたのであろうが、「ブー」のところは乗り物をずっと「ブー」と言い習わしてきたこととどこかでつながっているのかもしれない。ともかく口に出して試してみるとおもしろく思えて、機会があるたびに声にあげたくなったようである。こうなると、これまでの忠実な擬音化からはみ出している。

なお、この月は前月の「思い出して擬音化する」の例は、見られない。

4 発音をまねて言うことは盛んになるが、言えないことも多い

(ア) 昭和24 (1949) 年4月27日…「お隣からラジオ(N・H・K)の唱歌の音が『アー アー アー アー。』と聞こえてくる。それをまねて、『アー アー アー。』の文のように言っている。」(I, p91)

(イ) 昭和24 (1949) 年4月28日…「父が帰宅して、『タダイマ。』の文のように言うと、すぐに『ヤーン

ヤーン。』の文のようにまねてくりかえしながら、玄関まで出てくる。」(I, p92)

(ウ) 昭和24(1949)年5月3日…「母と外出して帰宅した時、母が父に『タダイマ。』の文のように言うと、それをまねて、『タダアア。』の文のように言う。『タダイマ』のうち、とくに『イ』がはっきりしないで、ひびきにくい。」(I, p94)

(エ) 昭和24(1949)年5月4日…「食卓の上にひとりである。おりる時、父・母が『ターン。』の文のように言う。すると、つぎに自分があがろうとする時、『ターン。』の文のように言う。」(I, p95)

(オ) 同年同日…「『パンツ』と言おうとして、『パンパ。』となる。『ツ』が言えない。」

(カ) 同年同日…「母が『マタ アシタ。』の文のように言い、くりかえして言ってやる。まねて、『マタ ア…タ。』の文のように言う。『アシタ』の『シ』は、聞きとれない。『マタ』も『アタ』ときこえることもある。」(I, p96)

(キ) 同年同日…「食事をしている時、サイレンがきこえてくる。それに気がつき、『アッ。』の文のように言って、耳をかたむけている。そばから、父が『ブー ブー ト ナッテルデショー。』の文のように言ってきかせたが、おどろきふしぎがって、一心にきいている。」(I, p95)

(ク) 昭和24(1949)年5月5日…「午前八時ころ、サイレンが鳴る。それが鳴りおわるころに、気がついて、『アッ ブーブー。』(→母)のように言う。昨日はまだ『ブーブー』とは言えなかった。」(I, p96)

(ケ) 昭和24(1949)年5月8日…「ふすまのすきまから、父のへやをのぞいている。それを母が見て、『オトーチャン アケテ チョーダイ。』の文のように父に言う。すると、父に向かって、『アケテ チョーダイ。』の文のように言う。だいたいばくぜんと、それと思うてきけばきかれる程度に言う。言ってみれば、雲がかかったような表現である。」(I, p96-97)

[考察] (ア) は、ラジオから聞こえてくる声が唱歌の「アー アー アー アー」だったようで、これはアを伸ばせばよいため、きちんとまねている。ただし、「アー」を四回繰り返すのは息が続かないのか、三回でとどめている。ところが、それ以降の言葉は二音目から変化があり、苦戦している。(イ)・(ウ) は、「タダイマ」をどう言うかである。そのうち、(イ) は、声を聞いた場が少し離れていて聞きとりづらかったのか、「ヤーン ヤーン。」と合わせている。筆録者も、元の「タダイマ」とかけはなれているため、念のため「『タダイマ。』をまねて、『ヤーン ヤーン。』と言っているのである。」(p92)と補筆している。一回の「タダイマ」のアクセントが高いままで終わるため、「ヤーン」と似ているような気がしたのだろうか。それに比して、(ウ) は、今度は「タダイマ」を言う立場だったこともあり、母が言うのを聞いて、「タダアア。」(→母)と言っている。これも、一緒に帰った母に言ったとすれば、はじめの二音はいいとして後はどう口を動かせばいいのという思いが湧いているのかもしれない。

(エ) は、食卓からおりる時、父母そろって「ターン。」のように言ってくれたため、幼児が上がる時にもそういうのだと拡大解釈して「ターン。」と言ったと言う事例である。うまく言えているのであるが、適用範囲を誤るとおかしいことも出てくるのである。しかし、そういう恐れがあっても、思い切って使っているうちに、少しずつわかってくるのであろう。(オ) パンツを「パンパ。」と言いまちがえた記録である。今言葉を覚えている幼児の立場になれば、たしかに語末も語頭と同じ方が言いやすい。3日後の5月7日にも、「『パンツ』は、『パンパ』と言ったり、『パッパ』と言ったり、『パッア』と言ったりしている。」(p96)とある。どれも語頭と語尾が同じだったり、語尾は慣れた発音だったりにしている。「パン」のあとに「ツ」と口を動かすことにはもっと先に慣れていくのであろう。

(カ) と (ケ) には、二語文が入ってくる。先に引用した「オトーサン ハイ。」も二語文であったが、当然一語文もままならない時だけに、どのぼあいも苦労している。(カ) の「マタ アシタ」も、母がおそらくゆつくりと、繰り返し言ってくれたために、やっと「マタ ア…タ。」と語尾も語頭も言えるようになったのであろう。(ケ) の「アケテ チョーダイ。」はいくら「雲がかかったような表現」にしてもでき過ぎであるが、二語のうちの一語「チョーダイ」をすでに言えるようになっていたことが大きかろう。

(キ)・(ク) のサイレンの音を「ブーブー。」と言えるようになるまでにも一心に聞く→翌日また聞いて、鳴りおわるころにやっとこの音を父が「ブーブー。」と言っていたのだと気づき、音声化するという過程があると知られてくる。車や電車のことをもう「ブーブー。」と言っている、サイレンの音としての「ブーブー」

は(ク)で初めてわかったと言えよう。

前月の「いろんな思いを今言える言葉で言ってみる」という面は、この時期には見られない。

5 言われたことを理解して多様に反応する

(ア) 昭和24〈1949〉年4月20日…「母がしかる時、『コラ イケマセン。イケマセン コラ。』の文のような、あらくきつい言いかたになる。このきつい調子になると、澄晴は泣きはじめる。」(I、p89-90)

(イ) 昭和24〈1949〉年4月24日…「北側の路上に出て、父とボール投げをしてあそぶ。父が『ポイ シテ ゴラン。』の文のように言うと、ボールをポンと投げる。」(I、p90)

(ウ) 同年同日…「夕方、母に夏みかんを買ってもらい、母に皮をむいてもらう間、ずいぶんうれしそうにおどりによるこぶ。そこで、母が父に、『オートチャン キテ ゴランナサイ。スミハレチャンガ コンナニ ヨロコンデ イルンデスヨ。』の文のように言う。父がいてみると、もう皮をむいてもらうのが待ち切れなくて、泣きだしてしまい、みかんを畳の上に投げだしてしまう。」(I、p90-91)

(エ) 昭和24〈1949〉年4月28日…「へんな表情をしているので、母が『ポンポン デス カ。』の文のようにきくと、おむつかごをさした。また、うんこをしたい時、『ウーン ウーン。』の文のように母に言う。」(I、p92)

(オ) 昭和24〈1949〉年4月30日…「母がくすり(オック)をつけてやろうとして、『スミハレチャン オックワ ドコニ アル ノ?』の文のようにきき、『サー オックオ ツケマシヨ。』の文のように言うと、すぐ赤チンのおいてあるところを見る。『オック』がどこにおいてあるか、おぼえているのである。『チュン チュン』(すずめ)がどこにいるかも知っている。」(I、p93)

(カ) 昭和24〈1949〉年5月7日…「母が『スミハレチャン パンツオ モッテ イラッシャイ。』の文のように言うと、自分のパンツをもってきて、片足をあげて、パンツをはくという。今までは、パンツをはくのきらって、にげまわって、母をこまらせていた。きょうはちがうので、母はよろこんで、『スミハレチャンワ オリコーサン ネ。』の文のように言う。」(I、p96)

[考察] 1年1か月の延長線上にあると言えようが、理解できるだけに反応がさまざまになってくる。(イ)の言われたとおりにしてみるだけでなく、(エ)の言われたことに答えるものを指さす、(オ)のどこにあるかを見て確かめる、(カ)の言われたものを持って来ることもしている。そればかりか、(ア)のように、言い方のきつい調子に泣きだしたり、(ウ)のように母の話しているのが待ち切れなくて泣きだしたりしている。

6 発音練習の発展

先月までのような発音練習は見られない。それに代わって、次のような例が挙がっている。

(ア) 昭和24〈1949〉年4月27日…「なにかのひょうしに、『クー。』のように音を出している。」(I、p91)

(イ) 同年同日…「『ター ター ジェー アー ター。』(→己)

自分の発しうる母韻を長くひき、それに拗音その他のものが加わっている。ひとところをじっと見つめるようにして、二本足で立って、このように言うのである。『チョーダイ。』『タータイ。』『チャーチャ。』『ブーブ。』などの一語文から伸びていこうとする過渡期のすがたの一つか。」

(ウ) 昭和24〈1949〉年4月28日…「今までは、『ブー』というひとりごとふうな言い方を得意にしていたが、『ブーテッ。』の文のように言う。くりかえし言う。」(I、p92)

(エ) 昭和24〈1949〉年5月4日…「『ワーン ワーン。マーン マーン。』のように、ひとりごとふうな言いかたをつづけてする。そのほか、はっきりとは聞きとれないことを、いろいろ言う。」(I、p96)

[考察] 長音化がたしかに目立つが、この時点ではそれがどういう素地になるのか判然としない。確かに一語文で終わらないことを言おうとする時、しっかり声を出す練習をしておいた方が言いやすくなる可能性はある。(ア)・(イ)から(ウ)への移り行きを見ると、一語の途中で口の動かし方が変わってくる時に備えた練習のように見えるし、(エ)への移り行きを見ると、一語の終わりを「ン」で終わらせる練習にも思えてくる。

三 焦点が絞られてくる（1年3か月目）

1 語として言えたり、言えなくて苦労したりする

(ア) 昭和24〈1949〉年5月9日…「ふすまの隙間から、『オトーチャン。』のように大きい声で父を呼ぶ。『オトーチャン』と、はっきりとは言えない。だいたい、それと意味がわかるような言いかたになってきた。父に、弁当を持ってきて、『オトーチャン ハイ。』と言ってわたす。そのばあいも、はっきりとは聞きとれない。」(I、p98)

(イ) 昭和24〈1949〉年5月15日…「ねこを見て、母に『ナーン。』のように言う。『ニャンコー』とか、『ニャンニャン』とか、まだ言えない。『ナーン』は、『ニャン』と『ナーン』の間くらいにひびく。」(I、p99)

(ウ) 昭和24〈1949〉年5月16日…「母と大内病院（広島市内）へ、近くの小川のおばさんの退院を迎えにいく。自動車に乗って帰ってくる。（中略）車から、電車を見かけると、『ティン ティン ブー。』の文のように、うれしそうに言う。」(I、p100)

(エ) 昭和24〈1949〉年5月17日…「けさ、寝起きに、『カーチャン。』のように母を呼んで起きてきた。」

(オ) 昭和24〈1949〉年5月21日…「自分で『チャン。』のように言いながら、すわる。」(I、p101)

(カ) 昭和24〈1949〉年5月22日…「気に入らない時、『イヤ イヤ イヤ。』のように言う。」

(キ) 同年同日…「しっこがおわった時、『ナイ。ナイ。』の文のように母に言う。はっきりとはひびかない。」(I、p101-102)

(ク) 昭和24〈1949〉年5月23日…「すわらせようとして、母が『チャンシナサイ。』の文のように言うと、『チャン。』の文のように言って、自分ですわる。また、じゃれ気味の時などは『チャーン。』の文のように言って、すわる。長音化もでき、表情をつけてものを言うことができるようになってきている。」(I、p102)

(ケ) 昭和24〈1949〉年5月24日…「ときどき、『イラン。』のように言う。」

(コ) 同年同日…「『アアア。』『チョーダイ。』の二つを一語文としておぼえたことは、このころの生活に、いろいろと愛敬をあたえている。」

(サ) 昭和24〈1949〉年5月29日…「朝、『オハヨ。』のように言いながら、くつをはいて、お隣の秦野のセイジくんのうちのほうへいく。『オハヨ。』は、おはよう。『アハヨ』になることもある。」(I、p103)

(シ) 同年同日…「父に首すじをおさえられている時、それをきらい、右手で父の右うでをたたきながら、『タン タン。』のように言う。」

(ス) 昭和24〈1949〉年5月30日…「朝食後、山陽本線の汽車が、家をゆすってすぎる。『ゴーツ』と音がする。それに気づき、『アアア。』のように言いながら、右手で窓の外をゆびさす。」

(セ) 同年同日…「へんじをする時、『アイ。』とは、なかなか言わないが、ふつうには、『アイ。』と言っている。」(I、p104)

(ソ) 昭和24〈1949〉年6月2日…「しっこをして起き、また、寝ながら、『オカーチャン。』のように寝言を言う。」(I、p104)

(タ) 昭和24〈1949〉年6月5日…「『オジチャン。』のように呼んで、お隣の浜本のおじさんのところへ、とんとこ、とんとこ歩いていく。『オジチャン』は、はっきりとは言えない。」(I、p105)

(チ) 昭和24〈1949〉年6月6日…「キャラメル類など、はっきりと『アメチャン。』のように言えることもあるし、また、言えないこともある。」

(ツ) 昭和24〈1949〉年6月7日…「お隣の浜本のおじさんを見かけて、『オトーチャン。』の文のように言う。また、『オジチャン。』と言ったりする。あいまいな言いかたで、どちらへもゆれるのである。また、おばさん（おじさんのむすめさん）を呼ぶ時も、『オバチャン。』のようになつたり、『バーチャン。』になつたりする。『バーチャン。』と聞こえる時は、『マー カワイソーダワ イマカラ バーチャン トカ イッチ。』と、おばさんがふんがいます。」(I、p106)

(テ) 同年同日…「はさみを見つけて、それを足のゆびさきにあてながら、父のほうを見て、口の中でも

ぐもぐいわせている。『チャン』とも、『チョキン』とも言えない。」(I, p107)

(ト) 同年同日…「父と散歩に出かける時、出かける方角をさして、『アッ アッ。』のように母に言う。わかれのしるしである。」

(ナ) 昭和24(1949)6月8日…「おっぱいがほしい時、『オッパイ チョーダイ。』が、『パイ チョー。』のようになる。」

[考察] (ア) (エ) (セ) (ソ) (タ) (ツ) は、親しい人に呼びかける言葉である。(ア)の「オトーチャン。」は、3月1日に「トーチャン。」と呼び、先月(4月)19日に「オ」をつけると「オ〜チャン。」としか言えなかったものが、はっきりでないにしても言えるようになっていく。母については、3月1日にあいまいに「アーチャン。」と言っていたのに、(エ)で「カーチャン。」になり、(ソ)でやっと「オカーチャン。」が出てくる。ただし、例には挙げていないが、6月4日にお隣の浜本のおじさんにも、「オトーチャン。」と呼んでおり、(タ)では「オジチャン。」とはっきりではないが言えている。(ツ)では、どちらにも揺れるとある。また、「オバチャン。」と「バーチャン。」も、どちらに聞こえることもあるらしい。呼称もやっと父と母までは、「お」をつけて言えるようになったところであり、その後は口に出して試しているところのようである。(イ)は、ねこを見て、幼児自ら「ナーン。」と言ったという。どこかでねこの鳴き声は聞いており、三か月前の2月17日には父に「ニヤーン。」ということも教わり、鳴く音がすると窓のところにいきたくて朝でも夢中になって見ていたのである。それでも、「ニヤーン」に近い「ナーン。」というまででせいっぱいだったようである。一方、(ウ)の電車を「ティン ティン ブー。」と言うのは、4月29日以来であっても、自分で言い出した名称だけに、自信をもって発音している。「ブーブー」が車であり、それに基づいて作り出した「ティン ティン ブー」だけに、まちがえることなく言えるのであろう。(オ) (ク)は、「ちゃん」とすわるという「チャン」である。何度も言われているらしく、自分でも(オ)のように言えるだけでなく、(ク)のごとく自在さを増している。

(カ) (キ) (ケ) は、いずれも否定したり拒否したりする言葉である、(カ)の「イヤ イヤ イヤ。」は、いやだという気持ちを表すのであろう。(キ)「ナイ。ナイ。」は、おしっこがもうないと言っているようである。(ク)「イラン。」は、母から与えられたものがもう要らないということであろう。こういう語を覚えて、自己の意思を的確に表すようになっていくのであろう。

(コ)の「チョーダイ。」は、4月以来、盛んに出てくる。要らないものは、「イラン」と断り、いるものは遠慮せずほしい気持ちを表すようになってきている。また、「アーア。」は、ある状況にあきれたり、がっかりする思いを表現したりするようである。5月13日には、寝言でこう言っていて、周りにいる側から見ると、夢で何を見ているのか想像したくなる場面にもなっている。二語は、全く違う場面に用いられるが、それぞれの場を思い出せるようなものにしていたのであろう。それで、「この二つを一語文としておぼえたことは、このころの生活に、いろいろと愛敬をあたえている。」と記したようである。

(サ) (セ) は、あいさつ言葉が出てきている。ただし、(サ)「オハヨ。」も、人に言うのではなく、ひとりごとのように口に出しており、(セ)の返事の「アイ。」も、やっとなきおき言うようになったようである。

(シ)「タン タン。」は、父に首すじを抑えられたとき、やりかえたようで、たたきだけでなく、口でもこのように音を出しているのだと示したものであろうか。音が聞こえてから言っているのではないため、自分で作っている音とみなして、ここにしておく。他方、(テ)は、はさみの音も思い出さず、使い方もこれとはっきりしないで、どういう音が出るかも言おうとして口を動かそうとするだけにとどまっている。

(ス)は、着目してほしい時の「ア ア ア。」で、指さすことも伴っている。よほど見てほしかつたのであろう。

(チ)の「アメチャン。」は、5月20日父が『アメ。』と教えても、「アパ。」としか言えなかったものである。誰に何がほしいと言いたくなかった時の意欲には見違えるものがあり、「チャン」まで加えている。

(ト)の「アッ アッ。」は、出かける方角を指して言っているので、母に『あっちの方に行ってくるからね。』とでも言おうとしたのであろうか。

(ナ)の「パイ チョー。」は、「オッパイ チョーダイ。」の省略形であるという。期せずして二語文が出てきている。ただし、幼児からすれば、きちんと「オッパイ チョーダイ。」ということは、長すぎてできず、

このような省略形しか言えないのである。

2 聞いた音を擬音化する

(ア) 昭和24〈1949〉年5月24日…「母が醤油を一升瓶からとくとくと注いでいる時。それを見ていて、『チャ チャ チャ。』(→母)のようにまねて言う。」(I、p102)

(イ) 昭和24〈1949〉年5月26日…「朝食の時、しっこを母にさせてもらっていて、しっこが出ると、『シッシー。』のように母に言う。」

(ウ) 昭和24〈1949〉年5月29日…「なにかにつまずいて、『ガチャン』と音をたてた。それをすぐにまねて、『チャン。』のように言う。」(I、p103)

(エ) 昭和24〈1949〉年6月4日…「なにかが、『バタン』とたおれる。それを見ていて、すかさず、『チャン。』のように言う。」(I、p104)

[考察] (ア) の「チャ チャ チャ。」は、とくとくとくという擬態語の擬音化ともいべき工夫で、音として表すのが難しい。それを何とかことば化している努力をほめるべきことであろう。母に言っているのだから、「(しょうゆが) チャチャチャと言っているね。」と共感を求めているのであろう。とくとくとくと同じく、三回繰り返しているところにも、日本語表現に近づいていることが感じられる。

(イ) のおしっこの表現も、大人の言いかたに近づいている。前月(5月)4日は母に促された「シ。」だけであったが、5月9日には自ら「シッ。」と言い、5月下旬には「シッシー。」と母に報告するまでに至っている。

(ウ) (エ) は、ちゃんとするという「チャン」ではなく、擬音語としての「チャン。」であるが、元の音は、「ガチャン」「バタン」のようにずいぶん違っている。それを使い慣れた「チャン」で言い表したのである。おおまかではあるが、こういうところから始まって、だんだん細かな音の違いを言い分けるようになるのであろう。

3 まねて言う場での試行

(ア) 昭和24〈1949〉年5月11日…「たんすの上に、五月の武者人形が飾ってある。それを父に抱かれて、とろうとする。父が『オニギョサン。』の文のように言うと、まねて、『オトーチャン。』の文のように言う。ついで、父が『オニギョサン。』の文のように言うと、『タイタイ。』の文のように言う。よろこんで、まねて言おうとするけれども、うまく言えず、今までおぼえてきたことば、『オトーチャン』『タイタイ』(魚のこと)などが出てくるのである。」(I、p98)

(イ) 昭和24〈1949〉年5月12日…「母と外出して、帰宅した時、母が『オトーチャン タダイマ。』の文のように言ってみせると、まねて、『オトーチャン アー アー ア。』の文のように言う。『タダイマ』と言えないので、『アー アー ア。』となる。」(I、p99)

(ウ) 昭和24〈1949〉年5月15日…「なにかもの(なんであつたかは逸録)を落とした時、母が『ペシャント オチタデショ。』の文のように言うと、代わりをほしがって、『チョーダイ。』の文のように言う。ついで、母がくりかえして、『ペシャント オチタデショ。』の文のように言うと、母の『ペシャント』というのを受けて、『ターン。』の文のように言う。『ターン』と落ちたの意。」

(エ) 昭和24〈1949〉年5月21日…「ふろから帰ってきた時、母が『オトーチャン タダイマ イッテゴラン。』の文のように言うと、『オトラリヤイヤ。』の文のように言う。『オトーチャン タダイマ』、まだうまく言えず、『オトラリヤイヤ』の文のようになる。」(I、p101)

(オ) 昭和24〈1949〉年6月5日…「父と近くの小川さんのうちへいつての帰り、小川さんの東隣の児玉さんの女兒が、『スミハレチャン。』の文のように呼ぶ。それに対して、父が『ハイ イーナサイ。』の文のように言うと、『アーイ。』の文のように言う。すこしひくめに素直に言う。」(I、p105)

(カ) 昭和24〈1949〉年6月7日…「『スミハレチャン。』(父→)の文のように呼ぶと、口の中で、『アーイ』と口形をして、それから、『アーア。』の文のように言う。時には、『アーイ』となる。」

(キ) 同年同日…「おもちゃの板底に、釘をうってやったのをおぼえていて、また、そこにうってくれと

言う。父が『タン タン タン タン。』の文のように言ってみせると、すぐに口の中で、『タン タン タン。』の文のように言う。声が小さく、まだあいまいである。」(I, p106)

[考察] (ア) 父に示された「オニンギョサン」がとても複雑で言えないため、覚えたての「オトーチャン。」と返した。父はそれでよしとせず、再度「オニンギョサン。」と求めてくる。仕方なく別の語「タイタイ。」を言ってしまう。

(イ) と (エ) とは、似たような場面であるが、幼児の対応が異なってくる。(イ) は、二語文のうち、一語目の「オトーチャン」をきちんと言うのに力を注いだため、二語目の発音が全くとらえきれず、「アー アー ア。」となったもの。とは言え、「ただいま」をゆっくり言えば、たー・だい・ま と分けられるから、一語内の高く言う音(ア列)を主とする三文節は、感じられているようである。(エ) は、張り切って二語とも言おうとしたために、はじめの二音までは「オト…」と言えたものの、後は何を言っているのか自分でもわからなくなっている。(ウ) も、親の発した二語文にどう対応するかであるが、「ペシャント オチタデ ショ。」と再度繰り返された際に、「ターン。」と答えている。

筆者は、『「ターン』と落ちたの意』としている。意味的にはその通りであろうが、文法的には、「ターン。」は動詞の役割まで含んでいるかもしれない。

(オ) (カ) は、1の(セ)の続きである。(オ)のように、一旦「アーイ。」まで言えても、また(カ)のように「アーア。」と聞こえてしまうことも出てくるようである。口形は「アーイ」と準備した上で声を発しているのにもかかわらず、「アーア」になるのである。一語の途中で口の形を変えて声を出すのは簡単ではないようである。

(キ) は、くぎを打つ音を父が「タン タン タン タン。」と擬音化してみせると、すぐにまねて口の中で小さく「タン タン タン。」と試している。繰り返すのも、父のように四度は無理で、三度にとどめている。どの語についても、初めはこういうところから進むしかないようである。

4 言われたことを理解することに力を注ぐ

(ア) 昭和24(1949)年5月15日…「パンをたべている時、父が『スミハレチャン パンパン オイシイ カネ。』の文のように聞くと、目をつぶるようにほそくして、かしらをそらせて、うれしそうにわらっている。」(I, p99)

(イ) 同年同日…「ふろから帰った時、父が『オブンブ ワ?』の文のようにきくと、右手でずっと向こうのほうをさす。」(I, p99-100)

(ウ) 同年同日…「にわとりを買って歩くおじさんがきて、自転車を路上においている。そのペダルをまわしてあそぶ。母が『オジチャンガ メー シマス ヨ。』の文のように言うと、おじさんの顔をじっと見ている。」(I, p100)

(エ) 同年同日…「父が『オテテ ツナイデ ノミチオ ユケバ…。』のように『オテテツナイデ』をうたうと、すぐに手をとってつなぎ、『イキマシヨ、イキマシヨ』の動作をする。」

(オ) 昭和24(1949)年5月29日…「ラジオ(N・H・K)の時報『ピン ポン チーン。』を聞くと、じっとそのほうを見ている。まだ、まねて言うことはできない。」(I, p103)

(カ) 昭和24(1949)年5月30日…「父が出勤しようとして、『サヨナラ。』の文のように言うと、花をつんで両手にもち、父の方に向いて、手をふる。」

(キ) 昭和24(1949)年6月6日…「父が『オツキサン ドコ?』の文のようにきくと、上のほうを向いて、そのほうをさし示すようになった。」(I, p106)

(ク) 昭和24(1949)年6月7日…「おもちゃのかず数え器を出して、父が『ヒトーツ、フターーツ。』の文のようにかぞえて言ってやる時は、かず数え器の珠のほうを見ている。ついで、父が『ミーツツ。』の文のようになると、すぐに父の口もとをじっと見つめはじめる。そして、ふしぎそうにしている。」

[考察] 8例とも、それぞれの場にふさわしい対応をしている。(ア)のように、口頭で答えなくてもわかると表情でおいしいことを伝え、(イ)(キ)のように場所を聞かれた時には、手や指でさして示している。(ウ)のように、「オジチャンガ メー シマス ヨ。」と言われれば、おじちゃんの顔を見つめている。(エ)の

ごとく、歌で楽しく散歩する場面が出てくれば、手をつなぎ、散歩に行きたいと言うそぶりを見せる。(オ) ラジオの時報を聞けば、その音の出どころを確かめようとする。(カ) 父の「サヨナラ」のあいさつに対しては手をふって答えようとする。そして、(ク) は、数え器の珠が動くのがおもしろかったのが、すでに覚えている「フターツ」を越えて、「ミーツツ。」と言われると、父がどんなふうに言っているのか不思議に思えて、口元をじっと見るようになったというのである。数への関心が芽生えた瞬間であろう。これから時間をかけて、数を覚えていくきっかけになったと言えよう。

5 ひとりごとのように音を発する

(ア) 昭和24(1949)年6月2日…「なにかという、ひとりごとのように『ブーバ。』の文を言い、それをなん回もくりかえして言う。」(I, p104)

(イ) 昭和24(1949)年6月4日…「ある時は、リズムをととのえるように『ブーチャ ブーチャ。』と、口から出まかせに言っている。おふろにはいった時にも、このような言いかたをする。」(I, p105)

[考察] 前々月・前月には、歯がはえてきたゆえのラ行をめぐる発音練習が主であったが、4月28日に「ブーテツ。」と言う事例が見られた。ここではその続きらしく、「ブーバ」・「ブーチャ」のように、両唇音から始まり、長音化する練習をしている。なぜ、このように進むのか判然としないが、何か理由があるのであろう。

おわりに

以上、1年1か月目から3か月目の言語生活の発達を以下の8点からとらえていった。

- (1) 行動に伴って言葉が出るようになる (1年3か月目はない)
- (2) 自ら語と意識して発する
- (3) 音を聞き、擬音化してみる
- (4) 思い出して擬音化する (1年2か月目・3か月目はない)
- (5) 発音をまねて言う
- (6) いろんな思いを今言える言葉で言ってみる (1年2か月目・3か月目はない)
- (7) 言われたことを理解して反応する
- (8) 発音練習の継続・発展

これらを一人の幼児がどのように位置づけて、活用しているのか、見直してみる。(1) 行動に伴って言葉が出るようになる項目は、幼児がそれほど意識しなくても行動している間に言葉が出ているものであるから、人間にとって最も自然に出てくるものである。とりわけ、行動的存在である子どもにとって、ことばの生まれる土壌ともいえるものであろう。それに対して、(2) 自ら語と意識して言う項目は、幼児語であっても一語一語新たに覚え、使っていかなければならないものである。表現の核になるべきものであろう。これら(1)・(2)とは違って、(3) 音を聞き、擬音化してみる、(4) 思い出して擬音化する項目は、聞いた音をその場で似た言葉にしたり、後で思い出して同じような音にしたりするものである。(5) 発音をまねて言う項目は、人の使っている言葉を聞いて、まねて言うことによってわがものにする方法である。いずれも、言葉を獲得する方法・手段として有力なものとなろう。(3)・(4)・(5)が根づいていて、(2)の自ら語と意識して使うこともどんどんなされるようになろう。他方、まだ言葉を獲得していないのに、何とか思いをわかってもらいたいという時には、とにかく(6) いろんな思いを言葉にならなくても言ってみることが必要になってくる。その発言を聞いていた人が「それはこういうのだ」と教えてくれれば、絶好の語彙・文会得の機会にもなってくるのである。

また、(7) 言われたことを理解して反応する項目は、相手の話を理解するのが精いっぱい、言葉を返すまでには至らず、行動に移すことにとどまることが多い。ただ、少しずつ訪ねてくれる時には、答えることもでき、会話する得難い機会にもなってくる。

(1) から(6)までが表現につながり、(7)が理解に力点が置かれるとすれば、(8) 発音練習の継続・発展は表現の基盤を固める項目と言えよう。項目間の関連をこのように考えれば、発達の指標は、以下の3点

になろう。

①表現においては、自ら語と意識して話すことが多くなり、一語文ばかりか、必要がある時は略した二語文も言い出し始める。まねて言うことは、少しずつ本格化し、ほしい時も、否定するときもはっきり言えるようになる。一語の途中で口の形が変わってくる時には、失敗しながら少しずつ言えるようになっていく。一語が長いものは、困難は倍加する。「トーチャン」は1歳になる前に言えたのに、「オ」を付けようと思うと、途端に言えなくなり、1歳3か月目にやっといえるという過程を経るのである。音を耳にして何とか声にする擬音化も重要な言語獲得の場になっているが、耳も成長の途中であり、日本の大人のとらえ方と違うことが少なくない。それにしても、どんな音でも言葉にしてみようとする意欲はさかんである。このような土壌があるため、話す契機はつねにあるのであろう。

②口形・発音練習は、0歳2か月目、7か月目からずっと続いて出てくるが、0歳後半のような頂点を迎えるような高まりはない。1歳1か月・2か月目は歯が生えてきたための舌の動かし方（ラ行）の練習が主であり、2か月目の終わりから3か月にかけては「ブー」で始まる発音練習がわずかに現れてくる程度である。実地に声を出す場が多くなればなるほど、そちらで鍛えられるのであろう。

③理解も、継続的に進んでいる。答えが必要な時でも、指差して済む時は、それで済ませ、表情で答えればよい時も、的確に判断している。周りの人が長い文を用いた時は、まず言おうとすることをわかろうとし、理解したうえで反応している。1歳余りの年齢であっても、聞き誤ることがない。昭和24（1949）年5月18日に、筆録者が、「このころになると、聞く力・聞きわけける力は、だいたいできてくる。」（p100）と述懐している通りであろう。理解は表に出て来にくいだが、表現の質を根底で支えていると言えよう。

1歳1か月から3か月へと進行するにつれて、項目は絞られ、言語生活としては軌道に乗ってきたように推察される。

〈引用文献〉

野地潤家『幼児期の言語生活の実態』I 文化評論出版 昭和50（1975）年12月1日発行 p754。

The development of language life of 1 years old period for the people who are engaged in preschool education based on “The rearities of an infant life”¹ (NODHI Junya)

Shinsho MAEDA

Advanced Course of Childhood Care and Education, Kyushu Women’s Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

The purpose of this study is to explain the development of language life of 1 years old period for the people who are Engaged in preschool education. On that occasion, I find on “The rearities of an infant language life” I (NODHI Junya)